

EAST-EAST 5 報告

リトアニアと日本の建築家・建築学生による国際交流イベント
2022年9月23日～26日 リトアニア・カウナス市

2002年の初開催以来これまで4回にわたって開催されてきたリトアニアと日本の建築家・建築学生による国際交流イベント「EAST-EAST」。第5回目の「EAST-EAST 5」は、リトアニア・カウナス市での「カウナス建築フェスティバル」にあわせて2022年9月23日～26日の4日間開催されました。今号ではその模様をご紹介します。

リトアニアと日本の建築家たちによる交流イベント「EAST-EAST 5」が、文化のオリンピックと言われる「欧州文化首都2022」の開催地としてリトアニア共和国カウナス市が選ばれたことにより「カウナス建築フェスティバル2022」の一環として開催された。2002年にリトアニアと日本の間の建築家・建築学生の交流の基礎を築くことを目的に始まったEAST-EAST。20年間にわたって築き上げられてきたEAST-EASTのレガシーを継承しつつ、キュレーターチームの世代交代、さらに全体テーマの設定やオンラインワークショップの開催などの新たな試みを取り入れながら、両国の交流と親交をさらに発展させることを目指した。ディレクターは西田^{おさむ}、展覧会部門キュレーターを川勝真一、ワークショップ部門キュレーターを海法^{かいほう}圭、フォーラム部門キュレーターを吉村靖孝が務め、総合ディレクターとして国広ジョージが参加した。また日本からは、西田、海法、吉村に加え、田根剛、山田紗子、津川恵理、富永美保、増田信吾、寺本健一、能作文徳、門脇耕三がJIAの代表として出展した。(敬称略)

●カウナス市について

バルト三国の1番南に位置するリトアニアは、その歴史の中で近隣の大国からの強い影響を受けながらも、独自の言語や文化を今に残す国である。とくに中世以降はポーランドとの連合国家を形成し、その後もロシア帝国・ソ連邦からの支配を受けた。EAST-EAST 5の会場となったカウナス市は、現在ではリトアニア第2の都市として知られている。しかし第一次世界大戦後、ポーランドが現在の首都ヴィリニウスを占領したため、第二次世界大戦でソ連に併合されるまでカウナスは臨時首都として発展した。そのためカウナスの市街地は、中世から続く美しい街並みが残る旧市街と、戦間期に開発された新市街に分かれている。新市街の中心にはヨーロッパでも有数の歩行者



バルト三国（エストニア・ラトビア・リトアニア）とその周辺国



西田司 (ディレクター) 川勝真一 (展覧会キュレーター) 海法圭 (WSキュレーター)

専用の自由通りが貫き、その周辺にはアールデコ風のモダン建築が今もたくさん残されている。これらは現在、カウナス市の重要な文化資産として見なされ、これらの建築的な遺産を活用した文化政策が行われている。EAST-EAST 5と同時に開催されたカウナス建築フェスティバルもそのようなバックグラウンドを持つ。



カウナス市新市街の様子

●日本とリトアニアの共通性

イベント名が示すように、両国はそれぞれアジアとヨーロッパの東端に位置する。しかし実際に現地を訪問して感じたのは、地理的なだけでなく、周囲の大国からの影響を常に受けつつ、独自の文化を発展させてきたという共通性だ。特にリトアニアはヨーロッパ諸国で最後にキリスト教化された国だと言われており、そのことはリトアニアの人々のアイデンティティーになっているようだった。たとえば人々の名前も、西欧社会に広く見られるような聖書に出てくる人物の名前にちなんだものではなく、光や水、森といった自然物を表す言葉に由来する名前が多いという。そうした自然崇拜、アニミズムの伝統を今もバックボーンに持っている点は、日本に暮らすものとして非常に興味深く感じた。

●アフターコロナのヨーロッパ

一方、現地でもとても驚いたのは、すでに新型コロナウイルスによるパンデミックは乗り越えられており、そこにはほぼ完全なるアフターコロナの世界が広がっていたことだった。事前に聞いてはいたが、屋外でもほぼ全員がマスクをしている日本とのあまりのギャップに衝撃を受けた。ワークショップに参加した現地の学生や建築家と話していても、コロナの話題になることはほとんどなく、取り上げられたとしてもすでに過去のもの、乗り越えられたものとして語られていた。しかしその代わりにリトアニア滞在中、強いリアリティを持って感じられたのはロシアとウクライナの戦争の影響だった。一見すると街は平和そのもので、戦争の気配を感じ取ることはできないが、しかし配車サービスの料金選択にウクライナへのドネーション付の金額が示されていたり、バスの電光掲示板にはウクライナへの賛同

が表示されたり、暮らしの中に戦争が埋め込まれているのを感じた。とくに初日のフォーラムが実施されたアリーナに併設された建物では、ウクライナから避難してきた子供たちが空き会議室などを転用して勉強する姿を目にした。事情を知らないで見るとただ子供が勉強している様子にしか見えず、微笑ましさすら感じる情景だったが、背景を知ることシリアスな現実を突きつけられた。聞くところによると他にもこうした空室を使い、ウクライナから避難してきた人々のために使われている場所が何箇所もあるという。その影響で現地の家賃も上昇しており、そのことが人々の悩みの種になっているようだった。

●全体テーマとしてのRecovery

今回からの新たな試みとして、展覧会、フォーラム、学生ワークショップの3つのプログラム間の相互の関連性を生み出し、議論や交流を活発化するための全体テーマを設定することがあった。日本とリトアニア双方で協議し決まったテーマは「Recovery(リカバリー)」。世界的な新型コロナウイルスの流行からの回復であるとともに、戦争で傷ついた状況からの回復ということを意識したものだった。とはいえやや遠大なテーマであったため、より建築的な問いとして位置付けるために、回復へのアプローチとなる3つのサブテーマを考えた。1つ目は「Play Ecology」。人々相互の交流を回復し、コミュニティの持つエコロジカルな側面を回復することを意図した。2つ目は「Ecosystemic Thinking」とし、人間だけでなく動物や植物、無機物なども含んだ存在者とのネットワークをいかに回復できるかを問うた。3つ目は「Planetary Imagination」で、昨今の環境問題への取り組みも含め、地球という惑星そのものへの想像力を回復するようなプロジェクトの可能性を探ろうとした。以下、フォーラム、展覧会、学生ワークショップについて紹介する。

(川勝真一)

●建築家フォーラム：Bridging

建築フォーラムは、カウナス市の現代建築の1つであるジャルギリス・アリーナで行われた。カウナス市の歴史的な街並みが残る中心市街地は、ネムナス川とニュリス川の合流点に位置するが、ジャルギリス・アリーナは、そのネムナス川の中洲にあり、市街地から全景がよく見える。スポーツ施設であると同時に、コンベンションや文化イベントにも使用されており、欧州文化首都のプログラムにも多く使用されている。建築フォーラムは、「欧州文化首都2022」および「カウナス建築フェスティバル2022」のメインプログラムであったため、カウナスの建築家に留まらず、首都のヴィリニユスをはじめ、リトアニアの各地から建築家や建築関係者が集まる大変期待値の高いイベントであった。

基調講演は隈研吾氏が担い、午前と午後で、日本とリトアニアの建築家が、交互にプレゼンテーションを行い、5人1組でクロストークを行うというプログラムであった。全体テーマの「RECOVERY(リカバリー)」を「bridging(ブリッジング)」するフォーラムの日本側のプログラムディレクターと進行役は、吉村靖孝氏が担った。

午前の部は、日本側は、海法圭、山田紗子、西田司が、リトアニア側は、SAアトリエの2人(Gabriele Sarkauskiene & Antanas Sarkauskas)、ProcessofficeのVYTAUTAS BIEKSAがプレゼンテ



日本とリトアニアの建築家によるディスカッション

ションを行い、その内容に関してクロストークを行った。海法のプレゼンは、東京の都市風景と田んぼの風景を比較し、電車や人の速度で建築を考えると、ゆったりとした田んぼの風景で建築を考える違いや面白さに関して気づきを与え、山田は、建築と植物を同じように捉えたとき、植物と建材のバランスや難しさに関して考えさせるプレゼンであった。SAアトリエは、大きなビジョンではなく、小さな要素や素材から空間をつくる手法を紹介し、プロジェクトで触れていた湿地帯の生態系と建築を一緒に考えるものは、RECOVERY(リカバリー)的なアイデアを内包し、VYTAUTAS BIEKSAは、歴史的建築と現代建築の混在するボリュームタイプ間に、公共空間をつくるプロジェクトを紹介し、新旧の建築物の互いの影響についてプレゼンし、新築をバランスさせていく難しさを共有した。クロストークでは、リトアニアの進行役から日本の侘び寂びについての言及があり、海法から日本人は、光や影など環境のあらゆるところに神を想像する文化背景を説明し、想像することで全体像を補完する「imperfection(不完全さ)」の可能性や創造性について議論が展開した。

午後の部は、日本側は、吉村靖孝、増田信吾、寺本健一が、リトアニア側は、AFTER PARTYの2人(Gabriele Ubareviciute & Giedrius Mamavicius)、ARCHESのEdgaras Neniskis がプレゼンテーションを行い、午前と同様にクロストークを行った。吉村のプレゼンは、「Ten Recipes for Recovery」と題し、鶏小屋や屋上、モバイルなど自然環境と応答する10の切り口で建築をレシピとして紹介し、増田は目に見えない信仰に関わる部分などピョンドアーキテクチャと建築について触れ、寺本はヴェネチアビエンナーレで金獅子賞を獲得した海水を淡水に変える際に出るサブカ(塩)を建築に応用していくプロセスをプレゼンした。AFTER PARTYは、2008年以降経済が下がった際に建築ができることを意識することでRECOVERY(リカバリー)を考えるようになったと話し、Edgaras Neniskisは、アーキテクチャル・アプローチと題し自身の多くのプロジェクトをプレゼンした。クロストークでは、午前と同様に、建築だけで自立することでは捉えきれないアプローチを持つことがリカバリーをテーマにした建築家の思考にあり、そこから創造行為に繋げていく設計の面白さに気付かされた。最後に隈研吾氏の基調講演は、それらの議論を歴史や環境と紐づけるような内容で、RECOVERY(リカバリー)が現代的なテーマであることを確認し、隈建築の作品の多様さを通して、300人を超える超満員の会場に届ける素晴らしい講演であった。

フォーラムを通して、モダニズム以降の近現代建築では、敷地の中に完璧な建築を作る手法を模索し、建築を自立的に捉えがちで、そのため外の環境や歴史の文脈と切斷が起こっていた。今回のテーマRECOVERY(リカバリー)は、環境の循環や歴史的な文脈から建築を考えるようになることで、建築だけで自立することとは違う、拡がりや連環を持つことになる。それはすなわち、建築家それぞれが、建築単体ではストーリーを語りきれない「imperfection(不完全さ)」を建築が持つことを創造行為そのものとして捉えており、興味深い議論であった。

(西田 司)

●展覧会：Recipe for Recovery

かつてカウナス市の郵便局だった魅力的な近代建築の1階を会場として実施された展覧会は展覧会タイトルを「Recipe for Recovery」とし、結果としての建築物だけでなく、そのプロセス、作り方にフォーカスを当てた展示が試みられた。リトアニア側からの強い要請によって、日本人建築家たちはそれぞれ、小さな模型やモックアップ、マテリアルのサンプルを設置し、回復に向けた処方箋を示した。先に示した3つのアプローチはそれぞれ相互に関係し、明確に切り分けることは難しいが、以下では便宜的に各展示を3つに分類しつつ紹介する。西田の公と私の2項対立を超えたコモンとしてのシェアスペースや、富永の敷地周辺のマイクロな出来事やマテリアルをネットワークさせつつ場所の魅力を耕す取り組み、また津川の機能主義では捉えられない身体性を伴った地形のような造形が多様な人の集う居場所を生み出す事例は「Play Ecology」への回答として読むことができる。また人間以外の存在物との関係を構築しうるかという「Ecosystemic Thinking」については、ニワトリのための村を構想した吉村のプロジェクトや、敷地の半分を立体的な庭とし、植物と暮らしのあり方を問いかける山田の住宅、建築そのものではない敷地のリノベーションを介して環境へと介入する増田、さらに日本の典型的な住宅を部材レベルで検証

し、国外での再構成を試みる門脇のプロジェクトなどが、有意義なヒントを示してくれた。そして雪という自然物とのローカルな結びつきを建築に取り込んだ海法や、土という存在に向き合う能作、海水から真水を生成する際に生まれる大量の塩を新たな建築のマテリアルとして捉えようとする寺本、地球スケールで刻まれた人類の痕跡を建築に取り込む田根らのプロジェクトは、「Planetary Imagination」の意味することをよく指し示しているだろう。リトアニアサイドの建築家たちのプロジェクトにも、敷地の環境への応答やコミュニティとの協働など多様なアプローチが見受けられ、詳細までわからないものもあったが、どれも大変興味深い建築のあり方を提示していた。会場構成の面では、日本とリトアニアの建築家の作品が明確に分けられておらず、両者のプロジェクトが適度に混ざり合っていたことは、対比や違いの強調よりも、両者の中に共通性を見出し、それらをネットワーク化することに寄与したと思われる。(川勝真一)

●学生ワークショップ：Play Earth

学生ワークショップ(以下WS)は両国から建築系の学生が10名ずつ、計20名が参加した。日本側の参加学生は公募したところ、予想をはるかに上回る応募があったため厳正な選考を経て選ばれた。両国2名ずつ5組の混成チームを作り、チームごとに共同作業を進める。テーマは「Play Earth」。カウナスの中心部に廃墟として残るブリタニカホテルを舞台に、5チームがそれぞれPlay with culture / economy / ecosystem / social / energyの5つの異なる切り口で、改修や利活用を検討する。全体は2フェーズに分かれており、前半は渡航前に開催するオンラインWS、後半はリトアニアに渡ったのちに対面で行うWSであった。オンラインWSは8月後半の5日間でzoomとmiroを活用して行われた。僕自身、学生および講師として10回程度の国際WSの参加経験はあったが、オンラインWSは初めてであり、非常に難しい試みになると予想されたが、結果は大成功であったと思う。最終講評日をもうけ、建築家にゲストクリティックとして参加いただいた。miroに5チームの活動状況や履歴がリアルタイムに可視化される。全チームが活動する画面の様子は、全体の一体感と躍動感を感じられるダイナミックな風景であった。今回の取り組みを通して、対面WSよりも以下の点で優れていると感じた。

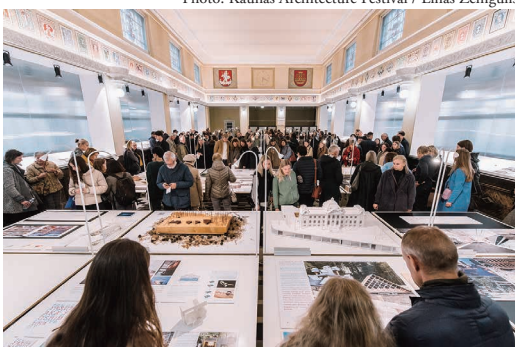
- ・他チームの検討内容をリアルタイムで覗き見ることが容易な点。タイトな日程の中で、全体を俯瞰できるため提案全体のクオリティのボトムアップやタイムマネジメントのミス防止等につながる。
- ・6時間の時差を利用することによる検討の継続性確保、言語を時差を利用してスイッチすることで思考の深化と多層化、同時にストレス低減につながる(朝9時から日本人2人が検討を開始し、15時(リトアニアで9時)にチーム4人で議論と検討、その後日本人が寝たあとはリトアニア人2人が検討を継続する形式による)。

その後の対面WSは、カウナス工科大学を会場に2日にわたって開催した。オンラインWSでの成果物をより進化させ最終プレゼンを行った。提案は多岐にわたった。例えば、生態系を研究するラボを増築し、農園やキャンプ場のある「循環型」研究施設の提案や、幼稚園を併設した地域のエネルギープラントとして再生しつつ瞑想・ヨガ・調理などの新たなアクティビティ

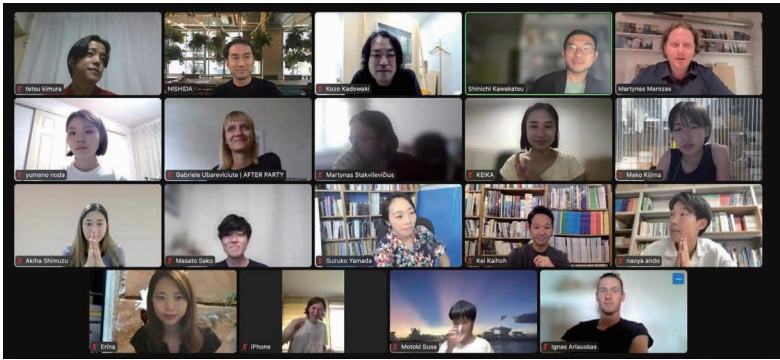


展覧会設営風景

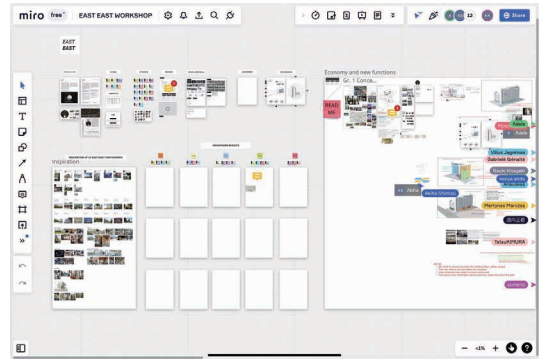
Photo: Kaunas Architecture Festival / Linas Zemgulis



展覧会オープニングの様子



オンライン学生ワークショップの様子。講評に参加した建築家は、西田司、川勝真一、門脇耕三、山田紗子、増田信吾、津川恵理ほか(敬称略)



オンラインWSでmiroを使った作業風景

Photo: Kaunas Architecture Festival / Kristina Podinskaite



現地での学生ワークショップ発表風景

の風景と太陽光パネルがビルのファサードに垂直的に立ち現れる施設の提案、「バブル」という伸縮自在な柔らかいコモンスペースを建物内外に散りばめて「放棄」の象徴であるリジッドな建物を地域に開放し、物理的にもやわらげようとするユニークな提案などがあった。

西田氏からは廃墟すなわち屋外空間として30年間残り続けてきたその価値を尊重し、屋外空間を

いかに残し設計するかが重要であるという指摘があった。田根氏からは建築家としてもっと勇敢に提案してほしいという激励のコメントがあった。その他参加建築家からさまざまな講評コメントがあり白熱した時間となった。

WSキュレーターとして総括するならば、カウナスの中心で放棄の象徴であり続けたブリタニカホテルをいかに開き、人・自然・まちと繋ぎ直し、どのような新しい象徴性を獲得させられるかが重要な命題であったと思われる。そういう意味でどの提案も新しい象徴性の萌芽を感じさせてくれたことにWSの成功を感じている。(海法 圭)

● エクスカーション

滞在期間中には、カウナスとヴィリニウスをめぐるバスツアーを楽しんだ。カウナスでは、活動場所としていた中心市街地を離れて、リトアニアを代表するモダニズム建築 (house of pranas gudavicius and aleksandra iljiniene) や杉原千畝記念館、郊外



カウナス市に残るモダニズム建築

に開発された自然豊かな住宅街などを訪ねた。

ヴィリニウスにおいては、リトアニアが過去にポーランドと同じ国であったことやソビエト時代があること

が、旧市街にゴシック、ロココ、新古典主義など多様な建築様式が混在している点に色濃く感じられた。例えばベルナルディン教会は、ルネッサンスやバロックの影響も感じられるゴシック教会で、ソビエト時代には軍用宿舎として活用されていたとのこと。冷戦後に修道女が戻り、改修を経て現在に至っている。郊外には、ソビエト時代の建物が大量に広がっており、それを象徴するテレビ塔など、当時の様子を色濃く残す都市地域を形成していた。また冷戦以降のリトアニアは経済成長を続けており、ネリス川右岸は大規模な再開発地区として注目されている。一見大規模建築が乱立する風景を生み出しているが、開発計画の一端に携わっている Martynas 氏との会話の中で、昔からある道を保存、復活するなど「recovery」の視点を可能な限りで持ちつつ計画進行している、という言葉が印象に残っている。

学生と一部の建築家はオプションツアーと銘打ち、田根氏にアテンドいただいてエストニアに赴く貴重な機会を得た。ここにおいても歴史の重厚さを体得するツアーとなった。タルトゥのエストニア国立博物館は負の遺産であるソ連の軍用地の跡地において、その象徴である滑走路を抹消することなく未来につながるように力強い軸線の建築に結実させている。その歴史の重ね方を直に体感する素晴らしい機会となった。またエストニアとリトアニアを相対化する機会を得られたことも大きい。(海法 圭)

西田 司(にしだおさむ)

1976年神奈川県生まれ。使い手の創造力を対話型手法で引き上げ、さまざまなビルディングタイプにおいてオープンでフラットな設計を実践する設計事務所オンデザイン代表。東京理科大学准教授、ソトノバパートナー。主な仕事として、「ヨコハマアパートメント」「まちのような国際学生寮」など。編著書に『建築を、ひらく』『オンデザインの実験』『楽しい公共空間をつくるレシピ』『タクティカル・アーバンニズム』『小商いの建築、まちを動かす』

川勝真一(かわかつしんいち)

1983年生まれ。2008年京都工芸繊維大学大学院建築設計学専攻修了。2008年に建築的領域の可能性をリサーチするプロジェクトRADを設立。以後、建築展覧会キュレーション、市民参加型ワークショップの企画・運営、レクチャーイベントの実施、都市やまちづくりのためのリサーチなどの実践を通じ、建築と社会の関わり方を探ってきた。近年は建築の展覧会の歴史や役割について研究を進めている。

海法 圭(かいほうけい)

1982年生まれ。人間の身の回りの環境と、人知を超えた環境との接点をデザインすることをテーマに、壮大でヴィジヨナリーな構想から住宅やプロダクトの設計まで、スケールを横断した提案を行う。現在、東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学非常勤講師。主な作品に、「上越市雪中貯蔵施設ユキノハコ」(2021)、「タカオネ」(2021)、「箱根本箱」(2018)など。第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展特別招待出展 (2021)